離村年少労働者の非行行為の契機に関する調査

その一——対象群としての離村年少労働者の生活——

社会福祉学科研究室
前田　栄
一番ヶ瀬　康子
田宮　良子
吉沢　英子
平松　美代子

一、まえがき

㈠　現在の日本農村における様々な問題については、今更論ずるまでもないが、その中の特に「離村」の態様は日本社会の特殊性を反映して、特殊な現象を呈しているといえるであろう。即ち家業たる農事の責任をもつ世帯主、長男すらも「出稼」という一時離村の形で、農家経済における現金収入の不足を補い、二、三男以下の世帯員は、生涯の生活の資たる職を求めて、「都会の労働者」へと完全離村の形をとるのである。この様な農村の「出稼労働」或いは二、三男の「都市への流出」という問題は特に現在に限られた問題ではないが、戦後の日本経済の窮迫した現状下では殊にそれが顕著な傾向となり、その移動数が近時激増している事は※野尻教授の報告にも表われている。

※　毎日新聞一月十五日附所載

㈡　この離村青少年を迎える都市の労働条件はいかなるものであろうか。野尻教授も指摘せられた如く、大企業の熟練度の高い、比較的安定した職種は、多く都市労働者の子弟のものとなり、離村青少年には中小企業、就中家内工業的な労働条件の悪い不安定な職種へ行く傾向が強いのが現状である。又この事実は国立教育研究所の青少年教育調査報告に於てみるごとく、大都市近郊以外の農村では、青少年は家業の手伝人として熟練労働者としての訓練期を無為に過すため離村後の都市労働者としては、熟練度の低い、労働条件の悪い職種につかざるを得ないという結果となるのである。

㈢　彼らは農村という人間的結びつきの強靱な、変化の少ない、安定感のある社会から、都会、殊に東京という人間的結合の弱い、変化の甚しい、不安定な社会へと年若くして唯一人で飛びこんでくるのである。農村青少年にとって大都会は不馴れな、不安定な社会であり、苛酷な環境であるといいうるであろう。

一方今日の大都会においては何れも、激増した青少年非行の問題に悩んでいるという現状が存在する。離村青少年にと

ってもこの問題に対して無縁であり得る筈がなく、彼らのうちのある部分は、その生活のうちから都会の非行少年へと転落してゆくという事は厳然たる事実である。日本の社会変動の一端として農村から都会へと押し出されてきた青少年のうち、大都会の激烈な生存競争と不安定との都市生活に堪えきれず、非行少年へと転落した青少年は現在の日本社会の全く象徴的現象ともいいうるであろう。

青少年非行のうち、特に離村青少年労働者をとりあげたのはかかる見地からである。

二、調査について

以上の目的にて一九五三年十月・十一月の間の期間に、東京家庭裁判所少年審判部の御協力を得て、都内の満十五才から二十才までの離村年少労働者のうち、非行少年、及び非行のない少年各々約八十名を対象に、家庭環境、離村時の状況、都市での職場生活、余暇生活、六四項目について面接法による調査を行なった。非行少年に対する調査は家庭裁判所にて実施し、非行のない少年は研究室員が、都内年少労働者の職業別、企業体規模別を参考にして、面接可能のものをえらんで実施した。

そのうち非行のない少年のグループ七十八名の調書がまとまったので、その結果を報告する。

三、基礎條件

此の調査の対象の年少労働者の基礎的なデータを略述すると次の如くである。

第1表 年令別

満15才以上	6%
16才 〃	12
17才 〃	9
18才 〃	28
19才 〃	44
不明	1

平均17才11カ月

第1表の如く、平均十七才十一カ月、全数の七二%が十八才以上である。

次に出身地を東京を中心として、その距離によってわけると七九%までは遠隔地である。隣接地は東京都に接している所、近接地は関東甲・信・静をさす。これは国立教育研究所の調査に表われた中小企業の青少年労働者の出身地が東北、北陸が大部分であるのと一致する。

次に出生地で、上京まで一度も移動せずに居住していたものは全体の七八%である。

次に家庭をみると父母のあるものが、六八%で最も多い。

第2表 出身地距離別

隣接地	13%
近接地	8
遠隔地	79

第3表 父母の有無・家庭

父母	68%
父母みの	3
実父母のない	9
実父母からない	14
わから	6

次に家庭の職業は農業が最大であり、その他製造業の工員、建設作業者、小売業者、所謂低所得階層が大部分を示す。

第4表 家の職業

農業	54%
林業	3
水産業	5
建設業	15
製造業	10
小売業	1
通信運輸業	0
サービス業	8
公務	1
その他職業	1
無職	1
不明	1

次に農業の場合、その七七%が、農地解放後の自作農であり、農

業の五一%は副業をもっている。

家族員数は六～八人が約半数、平均六・七人であり、これは昭和二七年全国平均一世帯当り人数四・九七人、郡部のみの平均五・三四人の何れよりも多くなっている。

同胞数は四～五人が最大で、平均四・八人となっている。

同胞間における本人の位置は二、三男以下が併せて七九%となる。離村年少労働者はやはり二、三男の問題であることを明らかに示している。本人の教育程度は中学卒が半数、高校卒が三分の一で、その他に夜間の高校、大学に通うものが相当ある。

以上の基礎条件を大づかみにいえば、平均年令十八才、出身地は相当遠く、半数は両親健在、家族は七人、その二、三男であり、中学か高校出身者で、夜学に通うものは一三%に達するという事になる。

オ5表 家族員数

2人	4%
3人—5人	24
6人—8人	53
9人—11人	15
11人以上	4

平均6.7人

オ6表 同胞数

1人	6%
2—3人	18
4—5	40
6—7	27
8—9	6
10人以上	3

平均4.8人

オ7表 本人の位置

長男	15%
次男	34
三男以下	32
末子	13
一人子	6

オ8表 本人の教育程度

中学中退	1%
中学卒	50
高校中退	5
高校在	8
高校卒	31
大学在	5

四、離村時の状況

序に於て述べた如く、日本農村の必然的運命はその社会に住む青少年に精神的刺戟を与えずにはおかない。

農村社会というものを青少年は、どの様に受け入れているか、またどの様な影響をうけているか、離村時の理由、社会との結び付き、義務教育修了後の希望等の観点から考察してみたいと思う。

A 離村とその要因

上京後既に二年～数年経過した後である為、純粋な当時の考を再現し得ているか否かは判断しかねるが、離村の理由は第9表に示す如く、進学の目的が最も多く都会への憧れ、独立を目ざして、村に仕事がないという順序である。この場合に村に仕事がないと回答した者一八%にとどまらず、潜在する数は非常に多いと思われるが、青少年特有の積極的要素によって覆われている結果とみてよいであろう。しかしその大半は、進学希望目的、都会への憧れ、成功目ざしての独立願望等々、積極的な希望をもちつつ上京し、その後の生活に夢を画いて離村するという点では一致していると言える。

中学校卒業後、上級学校に進学したいもの五六%、どうで

オ9表 離村の理由

進学(夜学)目的	30%
都会への憧れ	19
村に仕事なし	19
独立したい	18
成功をめざして	7
知人親戚がいたから	3
家、村への嫌悪	3
仕事を覚えるため	1

もでよいもの五%、全く嫌いとするものが一六%であった。その進学希望の理由は将来性（立身出世の意味大）のある為にと回答するものが、学校に進学したい者の大半を占め、好きだから、其の他を併せて二一%である。実際に進学したのは二十四名で、進学希望者五十四名の約半数である。この中には、上京後の進学者も含まれていることを考慮しなければならない。

次に進学出来得なかった理由について考察してみると、経済的理由が圧倒的に多く六六%を占めている。経済的理由で進学不可能なことは農村に限った問題ではなく、未来のある青少年が人生の第一歩の志望をふみ倒される事は大きな問題である。学校に行かれず、また農業をするだけの余裕を有せぬ青少年は自然離村へというコースをとる様にならざるを得ない。

オ10表 中学卒業後の進学希望

上級学校に行きたかった	56%
将来性があるから	25
勉強が好きだから	17
その他	14
どうでもよいと思った	5
上級学校には行きたくなかった	16
勉強が嫌いだから	5
学校に意味をもたず	3
その他	8
回答なし	23

オ11表 上級学校にゆかれなかった理由

経済的理由	38%
労働条件	8
家庭の事情	6
其の他	4
回答なし	44

五、離村青少年の家族関係

A 離村に対する親の態度

離村に対して青少年の親は如何なる態度をとったであろうか。本人の将来を思って承諾したものが最も多く示されている。承諾は併せて八一%で大部分を占め、一応反対の意志を示したもの一〇%、全く親に相談しなかったものがない事は恐らく非行少年グループと対照した場合に意味があろう。

オ12表 離村に対する親の態度

承諾した親	本人の将来を考えて	35%
	村に仕事がないため	11
	進学に関して	9
	其の他（含理由なし）	26
承諾せぬ親	淋しくなる	3
	家の人手不足	1
	不良化の心配	0
	其の他（含理由なし）	6
相談せず		0
無関心		8
回答なし		1

次に離村の理由の場合に少数ではあるが、村、家の生活に対する嫌悪というのがあったが青少年の家庭生活はどんなであったか。この調査では家庭生活については、僅少にしか触れていなかったが、家庭に於ける嫌な経験をとりあげてみると第13表の如くである。嫌な事を経験したもの二九%

オ13表 家庭に於ける嫌な経験

全く嫌なことはなかった	68%
感情問題	14
仕事の態度	6
金銭問題	3
其の他（含理由なし）	6
回答なし	3

でありその大半は、感情の問題となっている。これは離村に対して消極的な面から拍車をかけている要因として、あげることが出来よう。感情問題と回答した者を分析的に考察してみると、親子間の問題、同胞間の問題等農村社会の欠陥から原因して、家庭内の感情的な動きに少なからず影響していると云える。

B　家庭に於ける離村青少年の位置

前述の如く（第7表）この調査に於いては、次男が最も多く、三四%、三男以下三二%で大半を占めていることは、農村に於ける次二、三男の問題を明確に示しているのである。

次に離村してきた青少年が、家庭について如何に考えているかは第14表の示すとおりである。

オ14表　家についてどう思うか

始終考えた	父のこと	8%
〃	母〃	12
〃	兄弟姉妹〃	6
〃	その他〃	3
時々考えた	父〃	15
〃	母〃	25
〃	兄弟姉妹〃	11
〃	その他〃	6
殆どなし		13
回答無し不明		1

第一位を占めている理由である。

C　親戚縁者との関係

農村社会では、親戚知人の繋りが非常に強いことは周知の事実であるが、東京を選んだ理由のうち親戚知人があったからという者三一%で又東京に仕事があったからという二二%の二位を占める理由もその中に多くの知人親戚により、仕事を見つけてもらった者が多いと考えられる。尚これは後述の職場の紹介者に依っても明確に表われている。

D　結　び

比較的多数の者が、親戚知人を頼りとして上京し、親も承諾し相互の話し合いが出来て離村する結果となっている。従って、都会生活に於て拠り処が、ある程度安定していると言えるであろう。

オ15表　東京を選んだ理由

知人親類があったから	31%
仕事があったから	22
将来性があるから	20
憧れかから	12
進学容易のため	12
其他の	1
回答なし	2

六、都会に於ける職場生活

A　就職時に於ける問題

1　出村時の希望の職業と出村直後就職した職業の比較

出村時の希望と、最初に都会で就いた職業の割合が最も違うのは工業である。即ち、出村時に於て特に希望のなかった者が現実には、工業に吸収されたと言えよう。（第一図）

2　出村時に於ける職業選択の理由

1の理由を更に考えると、出村時に於ては、第16表の如き理由に基づき、漠然と自分の未来の職業を考えて居た訳である。

3　出村直後就職した職業選択の理由

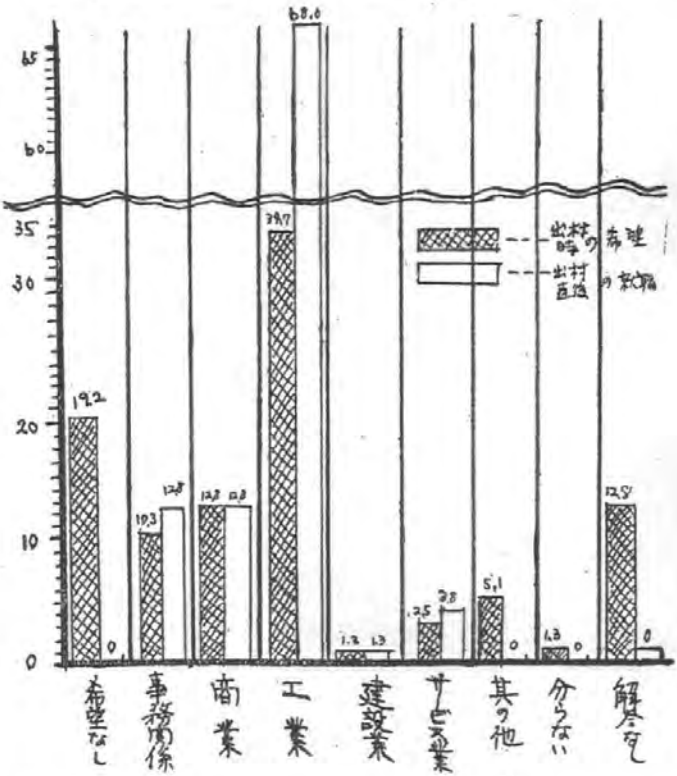
処が、現実には少年の理想は約七割以上が選択の余地なく、先ず夫々の職業につかざるを得なかった。

4　最初の職業の紹介者

そして、其の紹介者は上記の如く、大半、縁故者である。

尚、上京以前に、就職先の決って居たものは七五%で、その八六%は工業である。

才一図　出村時希望の職種と出村直後就職した職種の比較



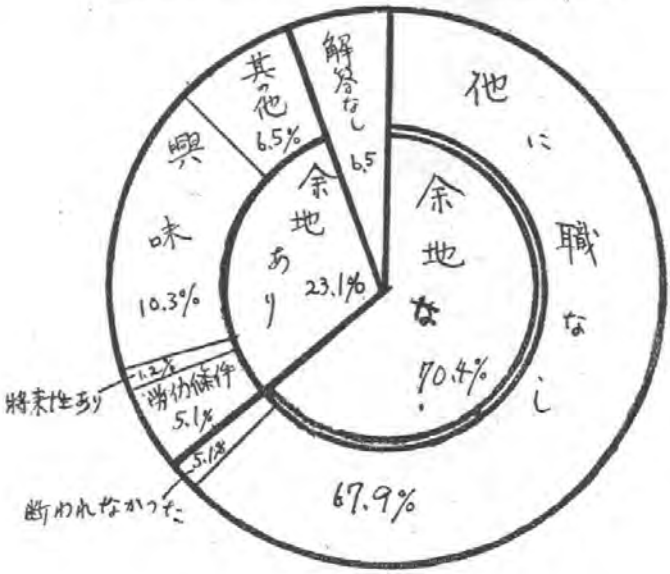
才16表　職業選択の理由

理由	%
興味	19
自分に合う	13
夜学にゆけるから	8
将来性がある	7
人のすすめ	4
労働条件がよい	1
理由なし	9
その他	5
わからない	1
回答なし	33

才17表　紹介者

紹介者	%
知人	30
親戚	22
職業安定所	15
学校	13
家族	12
友人	3
回答なし	5

出村直後就職した職種選択の理由



B 労働条件

1 企業の規模

労働条件の前提として、企業の規模が考えられなければならないと思うが、上記の如く、中・小企業が半数以上であり、殊に十人以下が多い。此の十人以下の企業は、商業が大半で、後は、サービス業、工業であり、五十名以上の企業は全部、工業及び事務である。

2 賃金

賃金は五〇〇〇円未満が約六〇%であるが、これは、中小企業が多い故であり、殊に二〇〇〇円以下は、商業・サービス業及び小企業の工業である。これでは当然生活費が不足すると思われるが、其の不足を表明したものは、

ヵ18表 企業の規模

企従業員数	%	職種
10名以下	21.5%	商業・サービス業・工業
20名以下	8.6	商業・サービス業・工業
30名以下	11.8	商業・工業
50名以下	7.5	工業・
100名以下	13.9	工業・事務
200名以下	3.2	工業・事務
300名以下	16.0	工業・事務
300名以上	11.0	工業・事務
不明	0	
回答なし	6.5	

ヵ19表 賃金

金額	%	職種
1,000円以下	5%	商業 サービス業
2,000円以下	9	商業・工業 サービス業
3,000円以下	9	商業・工業 サービス業
4,000円以下	11	工業
5,000円以下	16	工業・事務
6,000円以下	28	〃
7,000円以下	4	〃
8,000円以下	5	〃
不明	1	
回答なし	2	

二六・六%にすぎない。其の理由は、中小企業、特に商業・サービス業、小企業の工業に於ては、住込みで食事、衣服付が殆どである為、切実に其の不足を感じぬ故と思われる。尚、生活費不足の者の補給法は、上記の通りで、親族に世話をかける者が半数である。

ここに云う労働時間は、拘束時間である。工業及び事務関係は八時間～九時間であるにも拘わらず、商業及びサービス業が十時間以上である。

3 労働時間

オ12表 生活費補給法

補給法	%
親族の世話	50.0
我慢した	15.4
借金	11.5
前借	7.7
アルバイト	7.7
其の他	7.7

オ20表 其の他の給与

	その他の給与	%	職種
住込み	食事・衣服付	18.3	商業・サービス業・工業
	食事付	13.9	工業・事務
	衣服付	11.8	工業・事務
住込みでない	食事・衣服無	39.4	工業・事務
	食事付	2.2	〃
	衣服付	2.2	〃
通勤		16.0	
回答なし		2.2	

オ22表 労働時間

時間	%	職種
8時間以下	7	工業・事務
8時間	14	〃
9時間以下	44	〃
10時間以下	4	商業・サービス・工業
10時間以上	27	商業・サービス・工業
不明	1	
回答なし	3	

4 休憩、休暇

オ23表 休憩

時間	%	職種
なし	15	商業・サービス業
1時間以内	5	商業・工業
1時間	7	工業・事務
1時間以上	7	工業・事務
不明	3	
回答なし	3	

オ24表 休暇

休暇	%	職種
月1回	4	商業・サービス業
月2回	22	工業・事務
月3回	3	〃
月4回	28	〃
年10日以内	18	商業・工業
年20日	8	サービス業 工業
不明	0	
なし	14	
回答なし	3	

休憩、休暇も、労働時間と同じく、工業及び事務関係は、比較的多く定期的であるが、商店・サービス業等は少なく、不定期である。

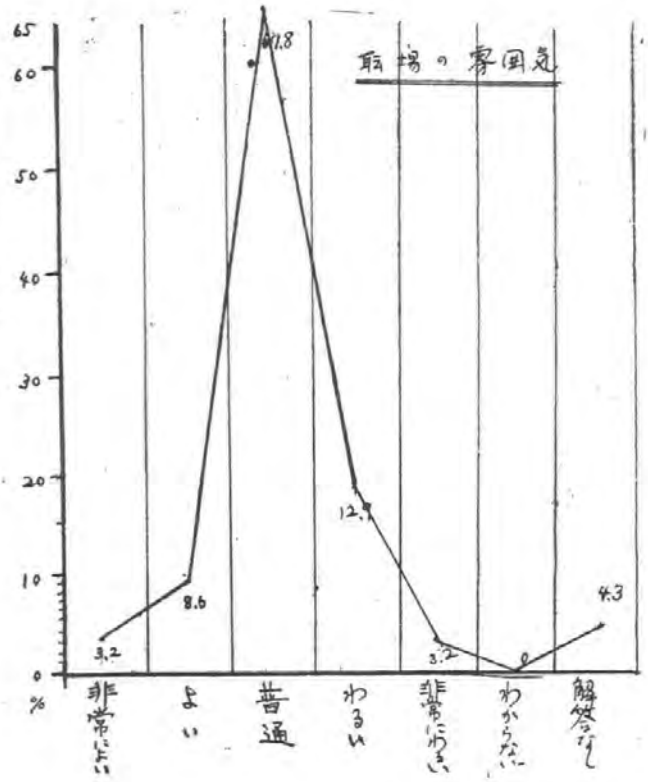
C 職場の雰囲気

職場の雰囲気は、次の五段階に別けて、集計した。

オ25表 職場の雰囲気

段階	内訳
非常によい	特に本人が満足している職場
よい	同僚及び上司間がうまくいっており、本人も満足している職場
普通	別に問題のない職場
わるい	感情的に本人が不満を持っている職場
非常にわるい	同僚間及び上司の制裁があり、感情的にもうまくゆかない職場

此の中、同僚間に於ける制裁のあった者は、サービス業及び商業である。



D 転職について

1 最初の職業に対する態度

最初の職業に「永く留って居たい」と思った者三九・八%、思わなかった者四九・五%、不明七・五%、解答なし三・二%であり、その理由は左記の如くである。

才26表 永く留っていたいと思ったか

	理由	%
思った	仕事に興味あり	17.5
	将来性あり	15.0
	技術を身につけたい	15.0
	対人関係に満足	7.5
	その他	17.5
	理由なし	15.0
	回答なし	12.5
思わなかった	労働条件に不満	27
	職場環境	10
	職種に不適当(精神的)	31
	職種に不適当(肉体的)	4
	対人関係(上司)	8
	対人関係(仲間)	6
	その他	4
	理由なし	4
	回答なし	6

2 転職回数

才27表 転職回数

回数	%
1回	36
2回	7
3回	0
なし	57

転職の回数一回以上の者は四三%であるが、其の中、半数は最初の職についてから半年以内に転職している。

3 転職の職種

左記の通り、工業間及び商業間の転職が多い。

第28表 転職の職種

職種	%
商業から商業へ	20.0
商業から事務へ	6.6
工業から工業へ	20.0
工業から商業へ	13.4
工業からサービス業へ	6.6
工業から事務へ	6.6
工業からその他へ	6.6
サービス業から工業へ	6.6
事務から工業へ	6.6
回答なし	6.6

第29表 転職の理由

理由	%
労働条件	33.3
精神的に不適応	27.7
肉体的に不適応	5.6
職場環境に不満	16.7
解らない	5.6
回答なし	11.1

4 転職の理由

転職の理由は、上記の通りであるが、此の理由を更に分析すると、次の類型が考えられる。

(1) 進学、或いは技能習得等の目的があり、其の為に、それに適した職を求めて転職する場合

(2) 労働条件のよい職を求めて転職する場合

(3) 無目的で、その職場が「嫌だから」転職する場合

本調査に於ては、(2)が大半であった。

5 失業期間の生活費の補給法

第30表 失業期間の補給法

補給法	%
なし	60.2
親族の世話	9
臨時雇	1
帰省	0
知人の世話	0
親方の世話	0
貯金	0
借金	0
その他	5
回答なし	25

失業期間に於ける生活費補給法は上記の通りである。

四、都会に於ける餘暇生活

職場生活が、生活の中心を占めていることは、前述の如く言うまでもない。しかし青少年にとって、余暇生活が職場でのきびしい生活の「ハケ口」ともなり、且つこれが慰めとなり、うるおいともなって翌日の活動の原動力となっているのも更に論をまたない事実である。この意味を有する余暇生活について住居との結びつきについて考察してみよう。

A 住、娯楽

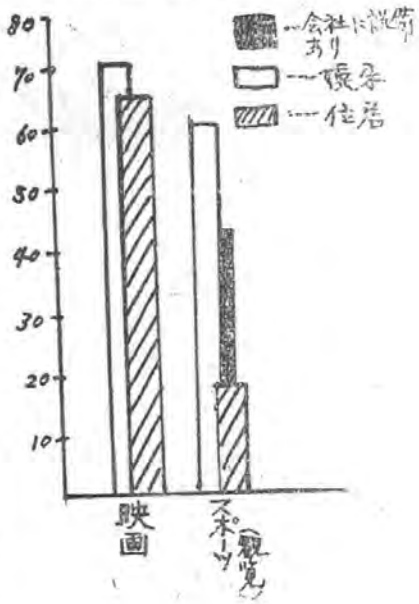
第31表に依れば、映画七三%第一位で現代青少年の傾向を如実に示している。映画観覧は月平均三回強となっており、休日には必ず見に行くのである。これを住との関連に於て考察してみるならば第四図の如く映画のある所に近く住をもつものである。この点スポーツの場合をみると、実技は職場内にその設備（ベースボールの出来うる空地）を有するもので、その他観覧では、住との関連なく観覧に出かけている。

第31表 娯楽の種類

類種	M. A.
映画	73%
スポーツ	62
読書	27
友人と雑談	20
飲食	12
遊戯	4
女遊び	1
その他	11
回答なし	1

スポーツ（観覧、実技）六二%、活動量の大なるものを求める青少年の当然な傾向を示している。読書をするもの二七%は読書に親しむべき年令層の青少年が、職場での生活

才四図　娯楽と住



で、その機会を与えられる事が少なく、或いは長時間の肉体的な労働の結果の疲労と時間的な余裕を持たぬという点から、読書の意慾も見出し得られないのである。読書に回答のある者をみても、種類としては、雑誌が八五%を占め、更にその中で映画関係のものが圧倒的多数九二%を占めている。

次に転住回数をあげてみるならば、第32表の如くである。

才32表　転住回数

転住なし	71%
1　回	24
2　回	4
回答なし	1

七一%の大部分は転住したことがないものであり、娯楽の種類から考察しても健全な生活をしていると云っても過言ではなかろう。

B　交友知人関係

上京後の友人の有無は第33表によるもので、平均人数五・三名となっている。これは都会生活に一応、順応し、落着いてきたことが言えよう。又第31表で友人との雑談二〇%になっている事に依っても、その一端を考察することが出来る。友人との話し合いの分類をしてみると、仕事の話をするもの二四%で、職場生活の不満を話し合うことによって、ある意味での満足感を得ている。映画娯楽に関して話をするもの二三%となっており、休日毎に観る映画の場面を長く維持してゆきたいという願を含めている。その他二八%の中には、同郷の者と家のことを話し合うもの、世間話（人の悪口、評判など）が含まれている。

才33表　友人数

なし	8%
一人	11
二、三人	18
四、五人	14
六、七人	14
八人以上	27
回答なし	8

一方彼等は、信頼して頼れる人、相談しやすい年輩の大人を求め、且つ必要としている。全体の八二%が相談出来る者を有し、親戚が四〇%、東京にいる家族（兄弟姉妹）一六%を占めている。これは第16表にも顕著に表われている親戚知人を依頼して上京してきた者と一致するのである点、日本社会の家族制度の根強さを表わしているとみることも出来る。この現象が若い青少年層の間に長い意味（抑圧的でなく、よき友としての関係）での関係が維持される限りに於ては、青少年の生活の安定を求めるに価する存在であると言え

よう。以上の項目については非行少年グループと比較した場合に大きな意味をもつものと推うのである。

C　都会生活に対する態度

以上述べてきた職場での生活、余暇生活を含めて離村してから二年乃至数年を経過し、尚長く留まっていたいか否かの質問に対しては第24表の示す通りである。

永く留まっていたという者の中、都会への憧れ二四％となっているのは、その中に年少の者即ち離村して間もない者が大半を占めている。これは離村の理由第9表に依るものと一致している。三、四年を東京で過した者は、仕事が覚えられる。一八％は一〇人以下の商店、小企業工場に働く者である。鋳物工の如きは一人前となって（雇主の言葉をかりて云うならば）仕事の面白さ及び周囲から認められるという喜びを持つことが出来、より永く留まっていたいのである。

理由なし一一％は、農村に仕事がなくて帰ることも出来ず、仕事にも、生活にも順応度が小ではあるが、唯漠然と東京を離れるのも惜しいといった者が含まれる。

才34表　東京に永く留まっていたいか

永く留まっていたい	仕事が覚えられる	進学が容易	都会へのあこがれ	其の他	理由なし	永く留まっていたくない	都会の生活苦	精神的不適応	その他	理由なし	不明（回答なし）
	18	9	24	14	11		3	3	4	4	10

同じく都会での生活を顧りみてよかったかどうかに対する回答を考察してみると、第35表に於て生活環境がよい。即ち便利な生活が出来るというものが五九％となっており、非常に都会生活に満足している者と、其の他三〇％の中には理由なしも含んでいる。都会生活がよくないとする二一％の中、精神的不適応が五〇％の半数を占めている。

この現象は、都会の騒音に堪えきれないというもの、生活に落着がないものとみる事が出来る。

才35表　東京の生活はよかったか

東京での生活がよかった	61%
生活環境がよい	59
仕事につきやすい	9
進学しやすい	2
その他	30
どちらとも云えぬ	12
東京での生活がよくなかった	21
精神的不適応	50
生活苦	25
職場生活が嫌だった	12.5
その他	12.5
回答なし、不明	6

M. A

D　結び

離村青少年の都会での生活態度からみて、比較的順応しうる型と、全く都会生活に順応しえない型と二つに分類する事が出来る。

前者は、職場でも友人とよく話し合いもし、社会性を有しているが、後者は数的に僅少ではあるが、友人数が少ないとい

う事実があげられる。尚後者の場合、商店の所謂小僧に出ている者が、その大部分を占めていることから、非常な小企業工場に働く者があることを考慮に入れておかなければならない。

まとめ

以上の調査結果から要点を拾ってみると

1 農家の二、三男が多い。

2 離村の潜在的理由は村に仕事がない事であるが、直接の動機としては進学希望、都会への憧れ、独立したい等となる。働き乍ら通学し、将来の社会的地位向上を計るというのが多くの青少年の共通の傾向とみられ、進学志望のためにというのが、多くの問の答にでてくるのである。

3 上京の際の頼りとして、又仕事の紹介者として親戚知人は大きな割合を示す。

4 離村時に青少年はそれ程はっきりした職種の希望はない。又たまたまその職があったからという理由で就職するものが多い。

5 離村青少年労働者が、中・小企業にゆく傾向はこの調査に限られた問題ではない。又この場合も同様の傾向である。

6 従って労働条件は総括して良くないが、商業・サービス業に於ては勤務時間、休暇、休憩等の条件は甚しくわるい。賃銀も同様である。

8 転職の経験はこの調査では半数以下であるが、非行少年には甚しく多い事は我々のプリテスト及び家戒三野氏の調査で知られている。その転職の理由は労働条件の良い所を求めてというものが多い。

9 余暇生活（娯楽）は概して健全とみられる。

10 友人は大多数がもっており、又、頼りにし得る人をも八〇%のものがもっている。

以上を通じて結局問題は中・小企業であり、殊に商店の小僧の労働条件である。彼らは友人と交際する余裕すらないのである。

以上の如き生活の中での彼らの将来の人間としての理想はどんなものであろうか。

何かの形で将来の理想、希望をもつもの（例えば大実業家になるとか、世の進歩に役立つ働きをとか等）	一七%
等現実の生活の中に希望を見出すもの（例えば忠実な仕事、たのしい生活等）	四六%
何も考えず漠然と過すもの	一八%
其の他	一%
回答なし　不明のもの	一三%

この調査は非行少年グループと対比した場合、明らかな意味をもつものであるが、その基礎資料として離村年少労働者の生活の実態を明らかにしたものである。